

卷 頭 言 — 刀筆の吏 —

小役人を指す言葉に「刀筆の吏」というのがある。辞書によると、まだ紙のない頃、竹簡に筆で記し、誤字は小刀で削ったところからこの語が出来たというが、紙が流布してからでも刀筆は下役必携の道具であつたらう。

私が昭和二十四年に東大史料編纂所に入った頃、大日本史料の原稿は和紙に毛筆で記すことになっていて、校正には朱筆を用いた。だから誰もが硯と筆墨を備えていたし、原稿作成の折には、史料の補入や排列の変更などの必要が頻繁に生ずるから、切貼りの為の缺と糊は手離せなかった。さすがに後では原稿も洋紙にインキで書くように変ったが、缺と糊は相変らず必需品であり、殊に私などはカッターを愛用して、字を削って書直すようなことにも使ったから、正倉院文書のおびたらしい切貼りの痕や、紙をすかして見なければわからないような巧妙な字の削り痕などを見る度に、何とも言えない親しみを覚えて「刀筆の吏」を連想したものである。

以前は紙が頗る不自由だったから、反古の利用は日常のことであり、史料編纂所でも、昇給通知などの書類は昔の書類を小さく切って、その裏に記して渡していた。またシベリヤ帰りの友人から、シベリヤの貧乏村役場では、中央に転がしてある大きな一連の巻紙から、めいめいが適当な大きさの紙を切って来て、丁寧に野を引き、さてその上で書類作りに取りかかるのだなどという話も聞かされて、とにかく千二百年前の正倉院文書の世界が至って身近に感ぜられたのである。当時の役人にとって正倉院御物にあるような刀子が必携の道具だったことは多分間違いないところであらう。

正倉院文書の続々修などの中には、本来のものとされる木軸で、いかにも不細工な削り方をしたものもある。これなどは

役人が、当座の間に合せに小刀で削って作ったのであろう。一方では、木を丁寧削って見事な軸を作って喜んでいた者もあったかも知れない。

木簡が、まとめてほぼ同一規格で作られたこともあったろうし、また折にふれてその場その場で作られたこともあっただろうことは、言うまでもない。そして下役人が皆大抵い刀子を持っていたとすれば、木簡を削って字を書直す姿もごくありふれたものだったかも知れない。

ただ、木簡の出土に際しては、必ずかどうかは知らないが、大量の削り屑と共に出て来る場合もあるようである。その場合、それらはどういう捨てられ方をしたのか、毎日のように出た屑がきちんと一定場所に集められたのか。それとも何かの区切りに、まとめて大量のものが始末されたのか。その辺の具体的な姿が浮んで来たら面白かろうと思う。

(土田直鎮)